

トリガー

【登場人物】

奥山 浩二

光江

長田 敏子

明子

藤村 智紀

林 大輔

井上 俊介

この物語は、現代を舞台設定とする。
ある年の春から、翌年の夏までを描く。

登場が多季節に及ぶ俳優は、このことを十分に意識し、演じること。

【第一場】 春

【1】 日曜日 夫婦／別居

【2】 月曜日 母、シヨートステイへ

【3】 火曜日 明子と藤村の再会

【第二場】 梅雨

【4】 水曜日 明子と藤村の密会

【5】 木曜日 母、拘束

【6】 金曜日 敏子の乱入

【第三場】 冬

【7】 土曜日 夫婦／離婚

【第四場】 夏

【8】 日曜日 再会

【はじめに】

千葉の公営住宅の一室。

それほど大きくない食卓があり、椅子がそれを囲む。

食卓にはパツとしないテーブルクロスがかけてある。

棚には食器などが収納されているが、そのすべてにチェーンが巻きつけてあり、鍵がないと中身を取り出すことができなくなっている。

台所周辺にも、包丁や調味料などはなく、すべて収納されている。

この団地は奥山浩二の生まれ育った場所だ。

高校を卒業して東京の大学に入学し、一人暮らしをするようになってからは、たまに帰るだけで、電車でわずか1時間半という近さが、逆に彼をこの土地から遠ざけた。

父は彼が高校2年のときに肺がんで、あっけなく亡くなった。堅実だった父親は十分な額の生命保険に加入していて、残りの住宅ローンを支払った後も、浩二の大学の学費と、母が生活していくぐらいの金が保険会社から支払われた。

奥山は大学を卒業すると、相模大野のある私立高校に教員として就職する。生徒たちの信頼もあつく、生徒会の顧問として学校にとってなくてはならないスタッフとなった。

5年前には妻、光江と結婚。30を過ぎてからの結婚だったが、やさしい性格の浩二と、物事をハッキリと言う性格の光江は、バランスが絶妙だった。光江とは、そのとき担任だったクラスのプロテクトの紹介で知り合った。光江は、化粧品会社の企画担当としてそのキャリアを確実に自分のものにしていった。

結婚後も、お互いに仕事をする、子供は作らない、というのが2人の結婚の条件だった。浩二は子供がいないわけではなかったが、その条件を理解した。2人合わせると、満足な収入があり、月に1回外食をするのがルールだった。贅沢な外食だった。

光江はマーケティングの事情や、会社の人間関係などについて話し、浩二はその話にならなづくだけで、決して自分の仕事の話はしなかった。

2人は都心の賃貸マンションに新居を構えた。管理人が常駐し、セキュリティのしっかりした場所だった。家を買うことも真剣に考えたが、あえて賃貸を選択した。月々の家賃は22万円だった。

光江が深夜に帰宅することも多かったこともあり、最初から2人は別々の部屋で寝ていた。当初から、あまりセックスもしなかった。

部屋には白を基調とした家具があり、すべて光江の趣味だった。しかし浩二はそんな生活になんの不满もなかった。

・・・浩二の母親が痴呆の気があると連絡が入ったのは、2人が結婚して半年ほどたった時だった。

【第一場】 春

【1】 日曜日の夜

床が濡れている。

浩二は、新聞紙に水分を吸収させて、それを大きなバケツに放り込む。それから雑巾をしぼって、床を拭く。

傍らに、割れた皿があり、床の作業が終わると、その破片を拾い集め、新聞紙にくるみ、これもゴミ箱に放り込んだ。

台所の鏡で、自分の顔を覗き込む。

右の奥歯がぐらついているらしく、さかんに触ってしまう・・・

帰り支度をした光江がやってくる。

光江 行ったら？

浩二 ああ。

光江 歯医者。

浩二 ああ。

光江 あるんでしょ？すぐそこに。

浩二 まあ、

光江 ほっとくと、大変なことになるわよ。

浩二 大丈夫だよ。ただ、ぐらついでるだけだから。そのうち、スポッと抜けるさ。それにその歯医者苦手なんだ。子供のころ、ひどい目にあわされて。

光江 へー。(鞆から化粧品を出し) いい？

浩二 ああ。(鏡からどいて、椅子に座る)

光江 (鏡に向かってメイクする)・・・でも、子供じゃないんだから。帰るだけだろ。

光江 ・・・なに？

浩二 そんな(化粧)しなくても。

光江 ・・・

浩二 誰にも会わないだろ。

光江 身だしなみよ・・・

浩二 そう・・・(と、光江のタバコを手にとってみる)変えたの？

光江 え？

浩二 タバコ。

光江 ああ、そうそう。

浩二 軽いの？

光江 そう、前のよりね。

浩二 やめればいいのに。

光江 ほんとよね。

浩二 何本吸うの、一日。

光江 たいしたことないわよ。一日、一箱いかないくらい。

浩二 そう。(と、タバコをみる) タール3ミリグラム、ニコチン0.3ミリグラム。

光江 ・・・

浩二 (タバコを置いて)吸ってみようかな、タバコ。

光江 いいわよ。その歳まで吸わなかったのに、いまさら。やめられない人だって、何人もいるのに。

浩二 そうかなあ。

光江 やめなさい。

浩二 なんか、新しいこと始めたんだよね。

光江 あるでしょ、別に、それだったら、タバコじゃなくて、プールに通うとか、

浩二 泳げないから。

光江 ほかに・・・ジョギングするとか、

浩二 そんなに太ったかなあ。

光江 もう少し痩せないと。

浩二 まあ。

光江 (眉を引き終わって)・・・ねえ、

浩二 なに？

光江 さっきはごめんなさい。

浩二 なに？

光江 あんなこと言っつて。

浩二 いいんだよ。その通りだから。かあさんの面倒をみる義務は、わたしにはない・・・その通りだ。

光江 言い方がね、反省してる。あんなふうになんか言わなくてもよかったって。

浩二 ……

光江 ごめんなさい。(と、また鏡を覗き込み、口紅を取り出す)

浩二 (椅子から立ち上がって)でもね、なんか寂しい気持ちで一杯だよ。

もちろん、君にかあさんの面倒をみてもらいたい、とか、そういう

ことじゃなくて、こうなんていうか、俺と光江の関係として、

それはね。あくまで、2人の問題として。

光江 (口紅をぬり終え、それを化粧ポーチにしまって)でもね、本当に申し訳ないけれど、ここで暮らすのは嫌なの。

浩二 通勤に時間がかかるから？

光江 ええ。

浩二 嘘。かあさんがいるから、だろ。

光江 まあ、それも・・・

浩二 (込み上げてくるものがあるが)・・・いいんだ、うん。

光江 ……

浩二 明日、例のアレ、だろ？早朝なんとか、

光江 ただの勉強会よ。

浩二 覚えられないんだよ、なんだっけ？

光江 ファシリテーション。

浩二 ああ、それぞれ、

光江 トイレ行っとこ。(ポーチを鞆にしまって、退場)

浩二 何時から？

光江 (声だけ) 7時半。

浩二、タバコを、吸う真似をしてみる。

冷蔵庫のチェーンを外し、中から牛乳を取り出し、直接口をつけて飲む。
光江、戻ってくる。

トリガー

光江 （一瞬その様子を見て）じゃあ、行くな。

浩二 気をつけて。

光江 うん。

浩二 今週は？

光江 たぶん無理。

浩二 そう。

光江 電話するから。

浩二 あ、ちょっと。

浩二、臭いの消えるスプレーを持ってきて、光江の衣服にかける。

光江 ああ、忘れてた。

浩二 気になるんだろ。

光江

浩二 部屋と、老人の臭い。

光江

浩二、スプレーするが、やがて、あらゆるものにスプレーをしだす。

浩二 臭うのかなあ、そんなに。嗅覚っていうのは、しばらくすると慣れる
っていうから、俺には全然わからないんだよ、その、お前が言うつ、臭
いってやつがさあ。

光江 じゃあね

浩二 (冷静になり)じゃあ。

光江疲れてない？

浩二 平気だよ。明日になったら、施設の人が来てくれる。しばらく休める
から。

光江 そう、よかった。

浩二 あ、これ、タバコ。

光江 置いてく。

浩二そう。

光江 でも、本当に吸わなくていいからね。

浩二 吸うときは換気扇の下で吸うよ。臭わないようにね。

光江、出て行く。

浩二は・・・見送らない。

鉄の扉が閉まる音・・・

浩二、牛乳を冷蔵庫に戻し、チェーンをかける。

そして、鏡に向かい、ぐらついた歯を気にかける。

【2】 月曜日の朝

林（施設職員）が部屋に入ってくる。

蛍光色のウインドブレーカーを着ている。

背中にはユートピアの文字。

浩二の母親がショートステイに出かける日。

林 なんか、詰まりました？

浩二 どうも、ぐらついて。

林 行ったほうがいいですよ、歯医者。

浩二 好き？

林 歯医者ですか？

浩二 うん。

林 好きな人間なんていないでしょ。普通。

浩二 だよね。

林 ほかに、荷物ありますか？

浩二 いや。

林 じゃ、ハンコを、これに。

浩二 お茶でも飲んでいけば？

林 次がありますから、ほんと、お気持ちだけで。

浩二 ……そうだよね、ちょっと待ってて、ハンコとって来るから。

浩二、ハンコを取りに行く。

林、所在なさそうに、部屋を見渡す。

そこに、団地の階上に暮らす、長田明子がやってくる。

明子 ご苦労様でした。

林 ああ、いえ、こちらこそ、手伝ってもらって、ありがとうございます。

明子 大変ですね、この仕事も。

林 まあ。

明子 多いんですか、こういうところ。

林 古いところは、たいがい、そうですね。

明子 バリアフリーなんて、言われるようになったの、最近ですもんね。

林 ええ。

明子 なってみて、始めてわかる、バリアの壁。

林 は？

明子 俳句研究会だったんです、高校の頃、わたし。

林 ああ。

明子 あんまり目立った活動はしなかったですけど。

林 バリアの壁・・・

明子、机の書類を見る。

林 ハンコを。もし、何かあったときのために、一応。

明子 腰に来ませんか？

林 え？

明子 いや、お仕事。老人ホームみたいのところって。

林 まあ、そりゃ。

明子 ですよね。お風呂入れたりするんですよ？

林 戦場みたいですよ、入浴は。一斉に入れますから。

明子 へー。

浩二、ハンコを持ってきて、押す。

林 あさつての夜まで、ということ。

浩二 ええ。

明子 何時頃ですか？

林 だいたい夕方の方の5時くらいですか。

明子 バイト5時までだから、ダッシュで帰るね。

浩二 いいよいいよ、大丈夫だから、気遣わなくて、

明子 遣ってないよ、ただ好きなだけ、おばさんが。

浩二 ありがとう。

林 (浩二に) 大丈夫ですよ。その時間で。

浩二 ええ、僕は。家にいます。

林 お願いしますよ。宅急便みたいにはいきませんから。

浩二 ?

林 持ち帰るわけにはいかないって、ことです。

明子 うまい!

林 へへ・・・じゃあ、私は。

浩二 すいません。お時間とらせて。

林 いえいえ。

浩二 また、夕方うかがいますから、様子見に。

林 無理なさらなくてください。今日くらい、ゆっくり過ごしてもらって

結構ですから。そのために、こういうサービスがあるわけですので。

浩二 高橋先生は?ドクターの。今日、いらっしやいます?

林 ええ、月曜ですから。

浩二 話もあるし、

林 そうですか?

浩二 あとで、

林 わかりました・・・では、ありがとうございました。(退場)

浩二 ご苦勞様。

林 歯医者、行ったほうがいいですよ。

浩二 ええ(笑)

鉄の扉が閉まる音・・・

明子、タバコを見つける。

浩二、やや疲れた顔をして戻ってくる。

明子 タバコ吸うようになったの?

浩二 いや。

明子 誰の?奥さんの?

浩二 ああ。

明子 忘れてったの?

浩二 (それには答えず) バイトは?

明子 今日は遅いの、 11時から。

浩二 へー。

明子 店長さんの娘さんがしたいんだって、バイト。春休みで。いい迷惑よ。
浩二 あー、腰痛い。平気？
明子 うん、全然。
浩二 若いなー。
明子 若くないよ、もう。
浩二 若いよ。
明子 毎週だと、大変ね。
浩二 でも抱きかかえるしかないから、車椅子も通らないし。
明子 下に降ろすだけで、一大事ね。
浩二 仕方ないよ、こういう構造なんだから。建物そのものが。
明子 もう少し考えて作ればよかったのにね。
浩二 まあ、でもそれを言ってもなあ……なんか、飲む？
明子 いらない。
浩二 そう。じゃ、俺は飲むよ。
明子 どうぞ。

浩二、冷蔵庫のチェーンを外す。

浩二 こうしておかないと、中を滅茶苦茶にするんだよ。しかも夜中に。気
 になつて寝りゃしない。
明子 ふーん。それで預けるんだ、おばさん。
浩二 ……結構、これでも追い詰められてるんだよ、
明子 ……（聞き流して）嫌だなー、バイト。面倒くさい。
浩二 なんのバイト？
明子 コンビニ。6メートル道路沿いのセブンイレブン。
浩二 なつかしいな、6メートル道路。（と、牛乳を取り出し）
明子 牛乳！
浩二 嫌いだっけ。
明子 飲むようになったわよ。あんまり好きじゃないけど、でも。
浩二 そう。（口をつけて飲む）
明子 （その様子を見て）やだー。
浩二 だって、俺しか飲まないもん。
明子 でも、菌が、そうやって飲むと。
浩二 菌？
明子 痛むでしょ。

浩二 でも冷蔵庫入れてるよ。
明子 それでもダメ。
浩二 そうなの？
明子 過信したらダメよ。冷やしておけばいいって、そういうもんじゃないのね。
浩二 そんなに嫌？
明子 嫌。
浩二 じゃ、やめる。今度から。
明子 いいのいいの、ごめん。
浩二 なんでー。やめるよ。
明子 旦那じゃないし、浩ちゃん。
浩二 え？もしかして、これが原因？離婚。
明子 そうじゃないけど、あいつもそうやって飲む人だったから。
浩二 「あいつ」って・・・なんか、負のエネルギー感じる。
明子 (笑って) 負のエネルギーか。
浩二 そう、マイナスのね、ベクトル・・・(牛乳を冷蔵庫にしまう) 道の幅なんでしょ？6メートル道路って。道の幅が6メートルって。たぶん、そうじゃないかな。
浩二 しかし、すごいね。
明子 なに？
浩二 コンビニ。たくさんできて。だってそこもあれなんですよ、深夜営業。食品売り場だけね。
浩二 そう。
明子 それだけ便利になったのよ。
浩二 同時にいくつかのものが失われた。
明子 例えば？
浩二 例えば・・・「我慢」とか。
明子 「我慢」？
浩二 夜中にどうしてもポテトチップが食べなくなったときの、我慢。
明子 そういうの失うっていう？
浩二 じゃあ例えば？
明子 環境とか、景観とか、なるほど。
浩二 普通そうでしょ？この文脈だと。
明子 時給いくら？

明子 え？
浩二 いくら？
明子 750円。
浩二 ふーん。
明子 安い。
浩二 安いなあ。
明子 じゃ、帰るわ。
浩二 え、帰る？
明子 帰るわよ。いろいろあるのよ、やること。少しは家のことやらないと。
浩二 今度ご飯食べに来なよ、なんか作るから。
明子 浩ちゃんこそ来てよ。おかあさん、言ってた。
浩二 元気？
明子 おかあさん？
浩二 うん。
明子 ちよっとうるさいけど、出戻りって。
浩二 (笑う) おばさんらしいね。
明子 ……不思議。
浩二 え？なに？
明子 だって、大人になって、結婚もして、離婚もしたのに、まだ私、浩ちやんって呼んでる。
浩二 変？
明子 なんか、もっと遠慮するかと思ったんだけど、変わらないものもあるんだね。
浩二 嬉しいよ。それ。
明子 へへ。
浩二 うん。
明子 ゆっくり休んでね。
浩二 うん。今晚は熟睡できるよ。おかげで。

電話がなる。

明子、退場する。
浩二、見送る。

浩二 (戻ってきて電話にでる) はい、奥山です。ええ、ええ、ああ、ええ、

なるほど、ええ、そうですね。え？ああ、息子です。はじめまして。いやですね、びっくりするかもしれませんが、母、最近呆けちゃいまして、ええ、マジで、・・・それでいま、その、施設へですね、ええ、いやいや、あさつての夜には帰ってきますから。ショートステイっていう・・・ええ、え？明日ですか？じゃあ、施設になっちゃうなあ、ええ、いやどっちでもいいですよ、僕は、ええ、それでも。ええ、うん、それでいいです。わかりました。待ってます。

浩二、電話を切る。

深いため息。

浩二、退場。

【3】 火曜日の夕方

ドアの開く音・・・

藤村という男が入ってくる。

浩二が後から入ってくる。(施設から帰ってきた)

浩二　いま、お茶入れますから。

浩二、急須に茶葉をいれ、ポットから湯を注ぐ。
湯のみにお茶を注ぎながら、

藤村　いつ頃からなんですか、奥山先生、

浩二　え？

藤村　いや、先生、

浩二　ああ、母のことか・・・もう3年くらいたつかなあ。

藤村　そうですね。

浩二　まあ、最初は、あんなじゃなくて、いろいろ自分でできたんだけど、だんだん進行してね。今じゃ、もうほとんどわからないかもしれない、自分じゃ。(お茶を藤村に渡す)どうぞ。

藤村　すみません。

浩二　(一口飲んで)意外とシヨックですよ。

藤村　え？

浩二 会ってもわかってもらえないと、自分のこと。

藤村 まあ、でも……

浩二 僕？

藤村 ええ。

浩二 もう慣れた、というより、あきらめの境地かもしれない。

藤村 ……正直シヨックです。ずいぶん世話になったものですから。

浩二 そう。

藤村 ええ。

浩二 知らなかったな。

藤村 え？

浩二 自分の母親が、そういう仕事、していたって。

藤村 ええ。

浩二 疎遠だったんです。いや、疎遠ということじゃないな。安心していたのかも。それなりに気にはしていたし、東京とここじゃあ、遠くもなし、いつだって帰れる、と思うとね。だから、ほとんどなにも知らなかったんだね、母親のことなんて。親って元気であるのが当たり前だったわけ。それがさ、急に呆けちゃって……こっちもそれなりに忙しいし、共働きだし、とりあえず老人ホームに入れて……2週間に1回くらい、様子見に行ってさあ。なーんか、よくわからなくて。どうすればいいのかなんて。今はとりあえず週の半分だけ預けて、でもなんとなく、不信感？あつて。ああいうところ、なんかねえ、ほら、商売でしょ、やっぱり、善意だとか、思いやりだとか、そういうんじゃないかって、ビジネスっていうかね……

藤村、部屋を眺める。

藤村 あれですか？

浩二 ……

藤村 お仕事は？どう、されている……(だんだん小声に)

浩二 ……

藤村 んですか？

浩二 教員やってたの、東京で。

藤村 へー。

浩二 ここからも通えない距離じゃないけど、ちょうど10年働いて、少し休みたい気もしてね、思い切って辞めました。時期もちょうどよかつ

たし、年度の終わりです。妻は、東京に。彼女も仕事してるし、まあ、別居だねえ、いわゆる。

トリガー

鏡を覗き込んで、歯を気にする。

浩二 いい歯医者知らない？

藤村 え？

浩二 ぐらついでるんだよ、歯が、

藤村 いや、僕も詳しくないんで、このへん。

浩二 地元じゃないの？

藤村 そこにあったじゃないですか。

浩二 ああ、あそこはなあ、だいいち名前がよくないよ。なんだよ、ニコニコ・デンタル・クリニクって。

と、また鏡を見る。

浩二 気になるなー、

藤村 行ったほうがいいですよ、歯医者は。

浩二 ・・・母に用があったって言ってたよね。

藤村 ええ。

浩二 なんだったの？

藤村 ああ、ええ、

浩二 それで帰省したんでしょ、帰省っていうか、
藤村 たいしたことじゃないんです。

浩二 言いたくない？

藤村 いえ。

浩二 よかったら。

藤村 大学に行こうかなあって。

浩二 大学？

藤村 ええ。

浩二 それを言いに来たの？

藤村 はい。

浩二 そうなんだ。

藤村 仕事辞めて、勉強しようと思っ、それでなんとというか、それを聞いてもらいたくって、その、おかあさんに。なんか、本当の母親みたい

な気持ちなんです。僕にとって。その、うまく言えないけど。報告し
たくって。

チャイムがなった。

浩二 はい。

浩二、出て、

浩二 おお、

明子 お客さん？

浩二 そう。

明子 これ、母が。

浩二 ありがとう。

明子 なんか、煮物。

浩二 入ってよ。

明子 でも、

浩二 なに遠慮してるの。

浩二、ラップがかけられた煮物の皿を持ってくる。
遅れて、明子がやってくる。

明子 すいません、突然。

明子、藤村を見る。

藤村、会釈。

明子も、会釈する。

浩二 あ、そちらね、藤村くん。

藤村 藤村です。

明子 長田です。

浩二 なんかね、うちのかあさんが、なんていうのかな、

藤村 お世話になったんです。前に。

明子 そうですか。

浩二 長田さんね、この上の階に住んでるの。

藤村 へー。
浩二 バツイチなんだよな。
明子 言わないでよ、そんなこと。
藤村 そうなんだ。
明子 え、いくつですか？
藤村 25、
明子 え、もしかして、あの藤村くん？
藤村 え？
明子 わからない？ほら、中2のとき、一緒だった。
藤村 そう？
明子 わからないかなあー
浩二 なに？知り合い？
明子 そうそう、同級生。
浩二 (藤村に) 覚えてないの？
藤村 すいません。残念ながら。
明子 ひどーい。だって、2年のとき、安藤先生のクラスだったでしょう。
藤村 うん。
明子 ほら、やっぱりそうだ。いやー、偶然！どうしてた？浩ちゃん、すごい偶然だよねー。
浩二 (お茶を明子の前に置いて) そうなんだ、へー。
明子 ほら、一回、授業中に貧血で倒れた人いたでしょ、あれ私！
浩二 覚えてる？
藤村 いや。
明子 じゃあさあ、山の村覚えてるでしょ？ほら、クラスでコピージミみたいなとこに泊まった……
藤村 ああ。
明子 あの時、肝試しで、道に迷って、帰ってこなくなっちゃった、バカがいたでしょ？あれ私！
藤村 ああ。
明子 じゃあさ、じゃあさ、学校の廊下にブラジャー落っこちてたことがあったでしょ。
藤村 ブラジャー事件。
明子 あれも私！
浩二 ひどい中学時代だな。
明子 もう、なんで覚えてないのよ！

浩二 仕方ないよ。もう何年もたってるんだから。

明子 でも、私こんなによく覚えてるよ！

浩二 それはあれだろ、明ちゃんが、好きだったんじゃない？

明子 そうかなあ。

浩二 そうだよ。

明子 転校してきたよね、たしか。

藤村 うん。

明子 だからだ、それで覚えてるんだ、私。ほら、だって、転校生って、目立つでしょ。いやあ、偶然？え、なんているの？

浩二 だから、かあさんの知り合いなんだよ。用があったみたいで。

明子 ……へー。会ったの？

浩二 (うなづく)

藤村 さっき、行ってきて、ホームの方に。ちょうど、夕食の時間だった、そう。

浩二 ちょっと、飲む？

明子 飲む飲む！

浩二 藤村くんは？

藤村 あ、僕は。

浩二 そう？

明子 飲めないの？

藤村 飲めないわけじゃないけど。

浩二 こっち泊まるんでしょ、今日は。

藤村 う……ん。

明子 泊めてあげれば？

浩二 それはまあ、構わないけど。

藤村 いや、いいですよ、そんな。申し訳ないし、帰ります、最終で。

浩二 いいよいいよ、どうせ暇だし。

明子 そうしなよ。思い出話しようよ。

浩二 じゃあ、明ちゃんも、言ってきたよ、待ってるんじゃない？食事。

明子 電話する。

浩二 すぐ上でしょ、

明子 だって、面倒くさい。

浩二 しょうがねえな、まったく。じゃ、ちょっとビールでも買ってくるよ。

藤村 僕、行きますよ。

浩二 いや、いいって。

藤村 いいです。

明子 あ、携帯忘れた。

浩二 行ってきなつて、すぐでしょ。

明子 電話貸して。

藤村 じゃ、ちよつと行ってきます。

明子 (電話する)

浩二 (藤村に) ごめんね、わかる？

藤村 すぐそのコンビニ、ありますよね。

浩二 確か。

藤村 適当になんか、買ってきますよ、つまみも。

浩二 うん、あとで精算を、

藤村 じゃあ。(退場)

明子 (電話で) あ、おおかさん、いま、浩ちゃんのとこ。うん、たまたま

同級生にあつてき、いいから、いって、大丈夫。ちよつと飲んでくから。うん、食べて。じゃあね。(切る)

浩二 おいおい、いいのかよ、

明子 いいのいいの、いつまでたつても子供扱い。

浩二 おじさんは、

明子 遅い、いつも。なんか、適当に食べてるから、あの人は。

浩二 そう。

明子 タバコ吸っていい？

浩二 どうぞ。

明子 家じゃあ吸えなくて。

と、換気扇を回して、タバコを吸う。

明子 彼、なんで来たの？

浩二 なんか、大学行くから、それを言いに来たつて。

明子 へー。

浩二 よく覚えてたね。

明子 だって、施設の子だもん。

浩二 何？

明子 クラスに何人かいたの、そう呼ばれてた人。できたの、私が中学のとき、そういう、なんか。ところ。

浩二 そうなんだ。

明子 もしアレだったら、うちでもいいよ。

浩二 なに？

明子 泊めるなら。

浩二 いいよ、

明子 布団とかあるの？

浩二 あるよ、適当に。

明子 そう。

浩二 それにおばさんびっくりするよ、いきなり男連れてきたりしたら。

明子 そっかあ、そうだよねえ、まあ、別れたばかりだし、まだ刺激強すぎるか。

浩二 そうだよ。倒れちゃうよ。きっと。

明子 あはは……。

浩二 バイトは？明日。

明子 休み、というか、休みになった。

浩二 また店長の娘。

明子 参っちゃうよ、勝手に。こっちは給料減るのに。

浩二 ひどいね。

明子 でも、文句も言ってもらえない。また探すの面倒だし、ま、休みなら休みでもいいかって、どうせ誰にでも出来る仕事なんだし。

浩二 ふーん。そんなもんか。

明子 そんなものよ。

浩二、もらった煮物を見て、

浩二 食べていい？

明子 どうぞ。

浩二 (煮物を食べて) うん、うん、上手だね、相変わらずおばさんの料理。専業主婦だからね、料理くらい上手くないと、だめでしょ？

浩二 (もう一口食べて) まあねえ。

明子 (タバコを消して) ちょっと着替えてくるかな。

浩二 なんだ、結局戻るんだ。

明子 これじゃあねえ、

浩二 いいでしょ、別に。

明子 なんか、食べ物もゲットしてくるから。

浩二 そう？

明子 任せてよ。

明子、息を浩二に吹きかける。

浩二 なになに。

明子 タバコ臭くない？わたし。

浩二 ああ、どうかな。

もう一回、吹きかける。

浩二 臭う。

明子 やだー、もう、

浩二 仕方ないよ、吸ったんだから、タバコ。そりゃ、つくさ。

明子 ま、いつか。息、吐きながら階段昇るわ。

明子、息を「ハー」と吐きながら、出て行くこうとして、

明子 もう少し持ってくる。

と、煮物の皿を持つ。

笑いながら、それを見送る浩二。

浩二 よろしくー。

明子、退場。

浩二、奥の部屋へ。

時計が秒針を刻む音。

【第二場】 梅雨

【4】 水曜日の夕方

雨である。時折、雷の音も遠くから聞こえてくる。

やや冷えるようだ。

薄着に毛布をまとった明子がやってきて、タバコに火をつける。

同じく、藤村がやってきて、

藤村　ちようだい。

明子　（火のついたタバコを渡す）

藤村　（吸う）

明子　おいしそうに吸うね。

藤村　だって小ちから吸ってるもん。（タバコを返す）

明子　不良。

藤村　まあね・・・少し冷えるねえ。

藤村、明子の身体を触る。

明子　やめてって。

藤村　くすぐりたい？

明子　冷たい、手が。

藤村　ちようだい。

明子　点ければ？新しいの。

藤村　臭うから。あんまり吸うと。

明子　どうして、いいでしょ、

藤村　最近、言われる。タバコ吸ってると、

明子　浩ちゃんに？（タバコを渡す）

藤村　（吸って）そうそう。

明子　へー。

藤村　居候の身だから。

明子　（タバコを受け取り、一口吸う）でも、トモのお陰で、助かってるん

藤村　でしょ？浩ちゃん。

明子　まあ、そうだと思うけど。

藤村　そうだよ、だから浩ちゃん、仕事行けるんだよ。救ったのよ、あなた

明子　が。危機を。

藤村　まあ。

明子　よくやってるよ。

藤村　うん。

明子　ねえねえ、

藤村　ん？

明子　私声大きくなかった？

藤村 え？そう？

明子 ねえ。

藤村 普通だろ。

明子 なんか、となりにおばさんいると思つたなあ、ちょっと下キドキした。

藤村 わからないよ、でも。

明子 そうだけど。

藤村 なんか着たら？今日は少しまだ寒いから。

明子 うん。そうしよっかな。(タバコを藤村に)

明子、退場。

藤村、タバコを吸い、火を消す。

やがて、明子、服を着て登場。

藤村に上着を持ってくる。

藤村 サンキュ。

明子 なんか、言ってた。

藤村 え？

明子 おばさん。

藤村 へー。

明子 寒いのかな。

藤村 平気だよ、朝、たくさん着させたから。それより……布団、た

まないと。証拠隠滅……

明子 そうねえ、あのままじゃあねえ、いかにもセックスしましたって感じ

だもんね。

藤村 ……しっかしよく降るよね、雨。

明子 だね。

藤村 滅入るな。

明子 そう？私好きよ、雨の日にこうやって2人での……ねえ？

藤村 なに？

明子 働かないの？

藤村 どうして。

明子 だって、大学行かないんでしょ、

藤村 行くよ。

明子 してないでしょ、勉強。

藤村 してるって、だって教えてもらってるもん。浩二さんに、

明子 最近、してないって、言ってた。
藤村 お前だって、してないだろ、バイト。
明子 だって、したくてもないんだもん。
藤村 だから、言つてやればよかったんだよ、ガツンと。店長だか、なんだかに。どうせこうなるんだったら。
明子 わからないでしょ、そんな結果論で言つても仕方ないよ。
藤村 まだ言つてないの？親に。
明子 うん、バイト行つてると思つてると思つよ。
藤村 そうなんだ。
明子 だから、こうやって会えるんだよ。わかる？
藤村 わかる。
明子 ホントにわかつてるの？
藤村 ホントだつて。

明子、藤村に抱きつく。

明子 (唐突に) もし、子供できたら、どうする？
藤村 え？
明子 もし、
藤村 ・・・どうするって、
明子 だつて、トモ、しないでしょ、避妊とか。
藤村 してるよ、
明子 してないよ、アレは。
藤村 え、してるよ。
明子 できてもいいんだと思つてた。
藤村 え？え？どういふこと。
明子 だから、しないから。そうなつたり、そうなつたで、それもいっかつて、そう思つてるのかと思つてた。
藤村 それ、重い話？
明子 そうじゃないけど、
藤村 だつて、普通だと思うよ、俺。別にいつもじゃないし、だつて、そう言つてるだろ、アキだつて。大丈夫だつて。
明子 嘘だつたら？
藤村 嘘だつて？
明子 今日は平氣つて言つてたのに、平氣じゃない日だつたら？

藤村 嘘なの？

明子 ねえ、訊いてるのは私。

藤村 ……そんな簡単にできないって……（と小声に）

明子 だって、あんなだけ「できちゃった結婚」するでしょ、みんな。

藤村 みんなは、みんな。俺たちは俺たち。……だから、いいと思ってる
ってことだろ。

明子 できてもいいの？

藤村 責めるなよ、そんなに。わからないよ。

明子 施設の子……

藤村 え？

明子 どういう気持ちだった？そう呼ばれて、中学のとき、

藤村 ……忘れた、もう。

明子 嘘。だってみんな呼んでたでしょ、あれ、ばかにしてたんだよ、きつ
と。トモのこと。

雨の音……

明子 嘘付いてないから、安心して。

藤村 なんだよ……

明子、立ち上がって、換気扇の下でタバコを吸う。

明子 何時頃？

藤村 え？

明子 浩ちゃん、帰ってくるの。

藤村 今日何曜だったけ？

明子 水曜。

藤村 じゃあ、まだ大丈夫。

明子 そう。

藤村 布団だけ、頼むよ。しっかり。

明子 私、奥さんじゃないのよ。

藤村 はいはい。

不意にドアの開く音。

顔を見合わせる二人。

明子、急いでタバコを消して、

明子 隠れてるから、脱出させて、

明子、退場。

藤村、タバコの臭いを拡散させるように、手をバタバタさせる。

浩二が帰ってきた。

浩二 ただいま。

藤村 おかえり。

浩二 ……また、タバコ吸ったな。

藤村 うん、ごめん。

浩二 あんまり吸い過ぎないようにしないと。いいことないんだからな、なにも……しかしよく降るね。

藤村 そうだね。

浩二 どう？様子、かあさん。

藤村 大丈夫、問題ない。

浩二 そうか。

藤村 早かったんだね。

浩二 ちょっと、熱っぽくてね。6時間目だけ、早退させてもらった。テスト前だったけど、ちょっとフラフラしちゃって、ダメだ。

藤村 大丈夫？

浩二 大丈夫じゃない。(と、奥の部屋に行こうとして)

藤村 あ、どうだった？

浩二 なに？

藤村 ほら、例の、昨日学校辞めるって言ってた生徒。

浩二 さあ。非常勤は、そこまで立ち入れないのよ。

藤村 そう。

浩二 なんか、無理に話そうとしてない？

藤村 いや、

浩二 ……ちょっと寝るわ。完全に風邪だ。

藤村 そうしなよ。

浩二 そうする。

藤村 あとで、なんか作るよ。

浩二 お願い。あ、明日でいい？

藤村 なに？

浩二 昨日の続き、二次関数。

藤村 ああ、うん、もちろん。

浩二 悪いな。

浩二、退場。

藤村、戸惑うものの、どうしていいのかわからない。

明子が、出てくる。

明子 じゃあね、

明子、出て行く。

浩二、ゆっくり登場してきて、

浩二 へー、あるんだね、こういうこと、

藤村 そうみたいだね・・・ちよっど行ってくる

藤村、あとを追いかける。

浩二、部屋に戻る。

雨の音。雷の音。

【5】 木曜日の昼

チャイムの音。

もう一度。

反応がない。

ドアの開く音・・・

林 あの一、奥山さん、ユートピアの林ですけど・・・いませんかー
入りますよー、入っちゃうぞー

施設職員の林が恐る恐る入ってくる。

林 奥山さん、奥山のおばあちゃん、

林、自らの行動に、不安を覚えるが、同時になにか心配しているようだ。

林　あのー、入りますけど・・・その、泥棒とか、そういうアレじゃないですかね、念のため、不法侵入とか、そういうことじゃないですか、そのへんをですねえ、

反応がない。

林、半ばあきらめ気味だが、帰るに帰れず、落ち着かない様子で、そのあたりに立ち尽くす。

パジャマ姿の浩二が、音もなく登場し、林の背後に立つ。

驚く林。

浩二　なに？

林　すみません、いらっしやったんですか。

浩二　なに？

林　いや、てっきり誰もいないのかと。

浩二　風邪でね、寝てたの。なに？用？

林　いや、今、たまたま近所を通ったもので、ちょっと寄ってみたんです。

チャイム、何度も鳴らしたんですよ。

浩二　知ってる。新聞だと思ってた。

林　無用心ですよ、鍵、かかってなかったから、

浩二　なんだ、かかってないと、勝手に入ってくるの、君は。

林　・・・これつまらないんですけど。

林、紙袋を渡す。

浩二　ああ。仕事？

林　え？

浩二　それとも善意？

林　ああ、善意というか、ちょっと気になって。だって、ほら、奥山さん、利用されなくなったでしょう。うち。だからどうされているのかとって。どこか他（ほか）、お使いですか？

浩二　・・・(咳)

林　ごめんなさい。じゃ、私これで・・・

浩二　いいよ、待って。大丈夫なの、君こそ。仕事じゃないの。

林 いま、ご近所のお客さん送ってきたところなんで。

浩二 そのお客さんって、やめなよ。いやらしい。

林 はあ、

浩二 金儲けみたいじゃない。

林 大変なんですよ。いま、どこもおばあちゃん、おじいちゃんの取り合
いで。

浩二 金になるから？

林 いやいや、そういうわけじゃないんですけど。

浩二 ……

林 僕はただの雇われ人ですから。

浩二 めずらしいねえ、男の人、ほかにいるの？会社。

林 事務系の人なら。

浩二 どうするの、女性の世話とか、下の。嫌がるんじゃない？

林 まあ、それはアシですけど、でも力仕事系は、男のほうが。

浩二 女性は、男のアレも平気でできるんだよな。不思議だよ。

林 なんかに惨めで、オシメの交換？やるほうもやられるほうも、

僕だって、母親のオシメ交換なんて、嫌です。他人だからできるんで

あって……あ、ごめんさない。

浩二 そこなんだよ。他人なんだよ、所詮。

林 すいません。

浩二 いいよいいよ……

林 ……ねえ、奥山さん、もし疲れたら、疲れきる前に、また連絡し
てください。ほんと、みなさん、思い詰めちゃう人とか、多いんで。

浩二 ……

林 ……いいですか？

浩二 なに？

林 ……一目、会って声かけさせてもらって、おかあさんに、

浩二 なぜ？

林 へ？

浩二 いまはもう、あなたには関係ないことだ。

林 奥山さん……

浩二 大丈夫だって、面倒はしっかり見てるし、ストレスもないし、あ、い
ま、手伝ってくれてるやつもいるんだ。養護施設なんかで、ボラン
ティアみたいなことやってみたいでさ、そこにいた藤村って奴が、
いま、なんか居候みたいになって……

林 よく聞きました、自分。入所したての頃、ほんとにニコニコ、話してくれて、まだ新人だったんですけど、逆に助けられたくらいで。

浩二 ……

林 まだ、奥山さんが、東京に住んでいた頃。僕、何度かご挨拶したんですよ。覚えてませんか？

浩二 ……そう。

林 ええ。

浩二 ……お茶、入れるよ。

林 いや、でも、もう。

浩二 いいから、飲んでいってよ、せつかく来てくれたんだから。

林 はあ。

浩二 どうなのかな。

林 どうって？

浩二 その頃と、いま、僕の顔。変わった？

林 変わったといえば、変わったような……どうでしょう。

浩二 ……そうだよな、いちいち覚えてないよな、他人の顔なんて。

浩二、お茶を入れようと振り返る。

その瞬間、林、奥の部屋に入っていく。

その後ろ姿を呆然と見送る浩二。

やがて二人分のお茶を入れ終わり、テーブルに置く。

咳をひとつ、ふたつ。

体温計を出して、体温を測る。

時計が秒針を刻む音がかすかに聞こえる。

ゆっくりと、林が姿を現す。

手には手錠を持っている。

林 (手錠を机に置いて) 問題は、鍵がすぐそばにあったことだと思いません。

浩二 なぜ？

林 拘束を解くものがすぐそこに見えるのに、自分ではなにもできない。虐待というより、拷問です。

浩二 調子が悪かったんだ。だって、昨日、早退までしたんだよ、仕事。

林 ……

浩二 (体温計を腋から取り出し) ほら、見ろ。今だって、38度2分！

ゆっくり寝なくちゃいけなかったんだ。昨日の俺は。いったいどうしろって言うんだ。夜中に、そのへんで小便もウンコもするんだ、臭いで目が覚める、本当にひどい臭いなんだよ、わかるでしょ？君だって。物を壊す、訳のわからないことを唱える・・・もう、うんざりだ！そういう日に限って、家には誰も帰らない、いったいどこへ行ったんだよ、あの藤村って男は！なにが、本当の母親だと思ってるだ？やっぱり他人なんだよ。ほんとうの息子は俺だけなんだよ。なにからなにまで狂っちゃった・・・自分の母親のせいでも何もかも・・・奥山さん、悪いことはないません。少し休みましょう。急に完全在宅ですから、相当ストレスがたまっているんです。僕、奥山さんは、こんなこと、本当はしたくないんだって、十分承知しています。それは、おかあさんを見ていればわかります。おかあさん、本当にあなたのことが・・・

林
奥山さん、悪いことはないません。少し休みましょう。急に完全在宅ですから、相当ストレスがたまっているんです。僕、奥山さんは、こんなこと、本当はしたくないんだって、十分承知しています。それは、おかあさんを見ていればわかります。おかあさん、本当にあなたのことが・・・

浩二
黙れ。他人になにがわかる？俺たち親子のいったいなにがわかるって言うんだ。

林
冷静に！

浩二
冷静だよ！

と、紙袋を投げる。

浩二
・・・どうするんだ。こういうの、報告するのか・・・

林
仕事で来たわけじゃないので、

浩二
しなくてもいいのか。

林
・・・ええ、義務はありません。

浩二
じゃあ、見なかったことにしてくれよ。

林
・・・個人的に、その、許せないんで、アナタが。

浩二
言うのか。

林
考えます、ひとまず。でも、なんとかしないと、いけないとは思いますが。少なくとも、こんなもので、拘束するなんて、

浩二
しないのか、君たちは、

林
しませんよ、もちろん。

浩二
そうか？本で読んだけどな。

林
・・・ねえ、奥山さん、そりゃ、奥山さんが、わたしたちの施設に疑問を抱くのはわかります。最低限の人数で、最大限の仕事をしようとしてるんですから、いくつかの問題点は存在しています。でも、少

なくとも僕は、人間相手の仕事だと思ってこの道に入りました。奥山さんが、自分で介護すると決断されたのは大変勇気のある判断だと思っただし、同時に、とても残念にも思いました。でも！・・・そのときは奥山さん、最後まで面倒を見る、それが当たり前のことだ、あんなたちののは、ただの流れ作業だって・・・ねえ、面倒を見るって、こういうことじゃあないですよねえ。

浩二 ……意外とはつきりモノを言うんだね、
林 すいません。

浩二 ……
林 ……

浩二 熱があつたんだ・・・たまたまだよ、
林 じゃあ、これ（手錠）はもともと家にあつたって、そうおっしゃるんですか？たまたまだつたら、少なくともこんなものは、家にあるものじゃない。

浩二 便利な世の中でねえ、こんな田舎でも、ちょっと車で走ると、遅くまでやってる店があるんだ。

林 じゃあ、昨日、買ったって、そういうことですか。

浩二 そうだ。

林 ……そうですか。

浩二 なんだか、刑事の取調べみたいだ。

林 すいません。そんなつもりじゃ。

浩二 これはこの家の問題であって、あなたには関係がない。さあ、帰ってくれ。もう少し、寝たいんだ。明日こそは、学校に行かなくちゃいけない。テスト前なんだよ。まだ、範囲が少し残っていて。

林 復帰したんですか。

浩二 いや、こっこの県立高校に、非常勤で。安いけど、なにもしないよりはとって。週に3日、

林 へー。

浩二 のんびりやってるんだよ。

林 ええ。

浩二 そういうわけで。

しぶしぶ立ちあがる林。

浩二 みんな元気？

林 ええ。

浩二 かあさん、元気だって、伝えておいてよ。

林 ・ ・ ・

浩二 頼むね。

林 また来ますから。

浩二 (答えない)

林 じゃあ。

林、出て行く。

林のお茶を捨て、軽くゆすいで、几帳面に布巾で水気を取り、しまう。
手錠を手にとり、奥の部屋へ。

【6】 金曜日の夕方

勢いよく、玄関から入ってくる藤村。

それを追いかけるように、明子の姉、敏子(としこ)が入ってくる。

藤村、奥の部屋に。

敏子 (部屋を見渡す)

明子 (追いかけてやってきて) やめてよ、

敏子 同じ構造だから、どこに隠れてもわかるわよ!

明子 人の家よ。

敏子 いいから、出たらっしやい!

明子 おばさんも寝てるんだから、

敏子 あんたが連絡してきたんでしょ、私に。

明子 いいから、どっか行こうよ。ファミレスとか。

敏子 逃げるなんて、卑怯者!

敏子、かまわず、奥の部屋に入っていく。

藤村、登場。

藤村 すごい姉ちゃんだね、しかし。

明子 だから、ファミレス行こうよ。

藤村 三人で?

明子 うん、

藤村 やだよ……

敏子、ハタキをもって登場。

敏子 (ハタキを刀のように構え) さあ、構えろ！

藤村 ちょっと待ってくださいよ。

敏子 成敗してやる。

藤村 だから、ちょっと待ってって。

敏子 結婚する気あるわけ？

藤村 え？

敏子 (明子に) お姉ちゃん、恥ずかしいわよ。

明子 いいじゃない、自分の人生なんだから。

敏子 私はねえ、世間体のことを言ってるわけ。あなたの人生云々よりも。

可哀想じゃない、おかあさん……ま、おとうさんも。

だからって、こんな風にしなくてもいいでしょ？

だって、それがお姉ちゃんなんだから、仕方ないでしょう。

仕方なくないわよ。顔見るなり追いかけて回して……

ちよっと、待ってよ、え？どうということ？

あんた話してないの？まだ。

いいの、ちよっと待って、だから。

なによ、もう。こういうことはね、しっかり責任取らせればいいの、

男に。それがルールってもんよ。

なに？

うん。

(藤村に) ほら、座って。

……

ファミレス行こうよ。

いいから。

……(座る)

あんたも。

……(座る)

(仁王立ち)

(小声で) なに？

うん。

ほら。

明子 ……やっぱり、ファミレス…あのね…

ドアの開く音。

浩二が、仕事から戻ってきた。

一瞬、その光景に驚くが、敏子が口を開く。

敏子 あら、おかえんなさい。

浩二 ああ。え？

敏子 ちよつとごめんなさいね。

浩二 え？まあ、え？なに、どうしたの。

敏子 久しぶりね。早いね。

浩二 ええ、まあ。え、どうしたんですか。

敏子 どうもこうもないわよ。

藤村 すいません。

浩二 なんかわからないけど、

敏子 (明子に) さあ、

浩二 子供は？

敏子 連れてきたわよ、上で見てもらってる。

浩二 へー。

敏子 居候してるんだって？彼。

浩二 まあ、

敏子 奥さんは、

浩二 東京。

敏子 なに、別居なの？

浩二 別居っていうか、まあ、仕事の関係で。

敏子 ここから通えるでしょ、東京なら。

浩二 朝とか早いし、

敏子 贅沢ね。家賃払ってるの、浩二さんでしょ。

浩二 いや、いまは8-2(ハチニー)にしてもらってる。

敏子 浩二さんが8？

浩二 いや、向こうが8、高給取りだから。

敏子 化粧品だっけ？会社。

浩二 そう。

敏子 (明子に) ほら、

明子 浩ちゃん、助けてよ。

敏子 なにが浩ちゃんよ、いい大人なんだから、そんな呼び方失礼でしょ！

浩二 いや僕はいいですよ、全然。昔からの呼び方で。

敏子 そう？

浩二 ええ。全然。

明子 嘘。

敏子 え？

明子 みんな嘘。ごめんなさい。

敏子 え？どういうこと？

明子 ただ、なんとなく、お姉ちゃんに相談したかっただけなの。だからそれで、そんな話してて、藤村さんと、口が滑ったっていうか。

敏子 ちよちよ、ちよと待ってよ。何よ、それ。え？

藤村 どういうこと？

明子 だから、子供ができたって、嘘ついたの。

藤村 できたの？

明子 (首を振る)

敏子 明ちゃん！

明子 ごめん。まさか、こんなことになるなんて、

敏子 なによ、ごめんじゃ許されないわよ。

浩二 まあまあ。

敏子 あのね、明ちゃんがね、今朝、電話してきたのよ。なんか、子供でき

たみたいって、それで訊いたら、無職だっというじゃない、彼。もう、

心配で心配で、

明子 ごめんなさい。

藤村 無職じゃないですよ、バイトしてるし。

敏子 無職っていうのよ、それは。

浩二 ま、よかったじゃない。

敏子 よくないわよー、寿命縮まったわよ、これで。

藤村 そんなに信用ないかな、俺。

明子 ごめん、そういうんじゃないの。

藤村 変だよ、こういうの。おかしいと思う。

明子 ごめん。

藤村

敏子 明ちゃん、

明子 はい。

敏子 謝って、みんなに。

明子
敏子
早く。

明子
藤村
いいよ、謝らなくて。

明子
でも、

藤村
いいよ、もう。

明子
ごめんなさい。

藤村
……これ以上、この部屋にいと、なんだか、ボロクソ言いそう……
ちよつと出てくるわ。(浩二に) 今日、朝から、ずーっと寝たままで、
1回だけ交換しましたから、オムツ……
浩二
ああ、そう、ありがとう。

藤村、そう言って出て行ってしまふ。
明子、どうしていいのかわからない。

浩二
いま、まだ、全部わかってるわけじゃないけど、あいつ、いろいろ
真剣に考えている奴だから、ああ見えて。
明子
知ってる。

浩二
溝とか、あんまり深くなっちゃわないうちに、話したほうがいいと思
うよ。

明子
うん。

浩二
さあ。

明子
ごめんなさい。

明子、藤村のあとを追いかける。

敏子
……あー

浩二
ま、座ったら。

敏子
(座らない) だって、怒りもするわよ、誰だって、そうでしょ？

浩二
まあ。

敏子
……なんか、バカみたい。

浩二
……毎日毎日、ちよつとずつ何かあるもんだよ、きつと。そうや
つて、少しずつ老いていくんだ。僕たちはみんな。

敏子
……

浩二
ほんとに座ってよ、今お茶入れるから。

敏子 子供預けたままだし、夕飯の準備もあるし。
浩二 いいじゃない、大変だろ？子供の世話っていうのも。
敏子 まあ。
浩二 自分のこと、なんにもできないから。
敏子 可愛いから、でも。
浩二 うん。
敏子 可愛くなかったら、殺しちゃうかもしれないって、そう思うときもある。だから、わかるのよ、最近あるでしょう、そういう事件。
浩二 あれは異常なんだよ。
敏子 そうかしら。
浩二 そうさ、特別なんだ。
敏子 ……こっちに帰ってきたって、知ってはいたんだけど。
浩二 うん。
敏子 なかなか顔出せなくてごめんなさい。
浩二 なに言ってるんだよ。いいんだよ、忙しいだろうし。別に気使わなくて。
敏子 おばさん、どう？
浩二 どうって……見事に呆けちゃったよ。
敏子 ……そうなんだ。
浩二 うん。
敏子 まだ、若いのにね。
浩二 うん。
敏子 電話貸して。
浩二 どうぞ。
敏子 (電話して)……あ、おかあさん？いま、浩二さんとこ。そう、浩ちゃん、そう。どう？あ、飲んだ。そう、うん、すぐ帰るから、またそれは話す、うん。明ちゃん、そっちいった？……そう、わかった。ありがとね、……マイちゃん、ママでちゅよー、ママもうちよつとしたら帰るからねー……うん、ありがと、うん。(と電話を切る)
浩二 帰ってるって？明ちゃん。(と、お茶を敏子の前に差し出す)
敏子 (首を振る) ありがと。
浩二 そう……(気分を変えて) すっかりママだ。
敏子 あとで、顔見てよ、
浩二 舞ちゃんだっけ？

敏子 うん。

浩二 いい名前だ。

敏子 ありがとう。

浩二 なんか久しぶりで、照れるな。

敏子 最後に会ったのは……

浩二 ずいぶん前だよ。たぶん。高校ぐらいから、なんとなくあったと思うし、照れくさいっていうか。

敏子 そうね。

浩二 もっと仲良くしていてもよかったのにね。

敏子 いろいろ話したいね。

浩二 なに？

敏子 ん？なんか、同じ団地の出身として、人生っていうか。

浩二 興味あるの？

敏子 興味っていうか、いいじゃない、大人になって、ゆっくりいろいろ話せるのって……いるんでしょ、しばらく。

浩二 うん。

敏子 いつまで？

浩二 多分……かあさんが死ぬまで。

敏子 ……もしよかったら、会いたい。

浩二 誰に？

敏子 おばさん。いい？

浩二 わからないよ、多分。

敏子 それでもいいから。

浩二 どうぞ。

浩二、退場。

敏子、そのあとに続く。

秒針の刻む音。

しばらくして、浩二出てくる。

座って、お茶を飲む。

やがて、敏子もやってくる。

浩二 ま、こんな感じだよ。

敏子 奥さん、なにもしてないの？

浩二 うん。

敏子 ひどいわね。

浩二 なぜ？

敏子 だって、普通、面倒みるもんでしょ。浩二さん、一人っ子なんだし。僕は、そういう感じじゃないから。

敏子 でも、

浩二 いいんだよ。これはルールなんだ。

敏子 ……

浩二 見る？もし、自分の旦那のお母さんが、もし、こんな寝たきりになつたとして。

敏子 ……もちろん。

浩二 へー。

敏子 それが普通よ。

浩二 偉いんだね。

敏子 偉くないわよ。

浩二 子供は産まないって、約束してたんだ。結婚するとき。でも、親を看ないって約束はしなかった……知ってる？この団地、階段、車椅子、通らないんだよ。幅が狭くて。

敏子 そうなんだ。

浩二 想定がなかったんだよ。建てるときに。将来、こんな時代になるって。

ある意味、バカだよ。人は歳を取るってことは、誰にもわかることなのに。

敏子 (うなづく)

浩二 敏子ちゃんだって、子育てしてる。自由を奪われる。それと同じさ。

敏子 老人の世話は。

敏子 子供には未来がある。

浩二 うん……そうだね。

敏子 あーあ……

浩二 なになに。

敏子 ん？なんか、空回りしちゃった……あの子、どんな子なの？

浩二 藤村くん？いい奴だよ。

敏子 ……電話でね、母が言うの。明子がまた変な男につかまった、あー心配だ、大丈夫か、もう恥をかくのは嫌だ……聞いているこっちがうんざりするぐらい……だから私もね……頭では勝手にやればいい、明子の人生なんだし……そう思うんだけど、なんか……気になるの……彼、複雑な家庭なんですよ？高校も行ってないっ

浩二　　ていうし。中学の頃、茶髪だったっていうじゃない。

浩二　　大丈夫だよ。もう大人じゃないか。誰にだって、複雑な年頃はあるし、複雑な家庭の子だって、いくらでもいる。でもみんなまともな大人になる。

敏子　　でも施設出身なんですよ？

浩二　　それが？

敏子　　浩二さんがそう言うんだったね……。少し安心するけど……。でもね、もう、子供できたなんて聞いちゃうとさあ……。一度、あったからね、明子、結婚する前に、高校のころ。

浩二　　へー。

敏子　　堕ろしたけど。でも、おかげで家族が、バラバラになりかけた。

浩二　　……。ねえ、

敏子　　なに？

浩二　　抱かせてよ、舞ちゃん。

敏子　　うん。

浩二　　ね、

敏子　　そうね。

浩二　　ね、行こう行こう。

敏子　　（湯のみを片付けようとして）

浩二　　いいよ、そのまま。

敏子　　ありがとう。

浩二　　先、行っててよ。ちょっと着替えて行くから。

敏子　　うん。

敏子、出て行こうとして、

敏子　　もしよかったら、母と話、してくれないかな。

浩二　　え？

敏子　　彼のこと、その、人柄とか。安心させてあげたくって。

浩二　　うん。

敏子　　浩二さん言ってくれたら、母、きっと安心すると思うから。

浩二　　わかった。

敏子、出て行く。

浩二、湯のみなどを、いつものように、軽くゆすいで、水気を拭き取る。

そして奥の部屋へ。
しばらくして、ラフな服装に着替えて登場。
鏡で歯を見る。
そして、出て行く。

【第三場】 冬

【7】 土曜日の夕方

藤村と明子の結婚式の夜。
着物を来た光江が入ってくる。
荷物を置き、手を洗う。
しばらくして、浩二が登場。

浩二 着替えれば、

光江 いいわ、すぐ帰るから。

浩二 帰るの？

光江 ええ。

浩二 だって、明日休みだろう。

光江 月曜の準備があるのよ。

浩二 そう。

光江 ええ。

浩二、退場。

光江、携帯電話で、どこかに電話する。

光江 もしもし、あと少ししたら行くから。うん、お願い。

電話を切る。

光江、引き出物の中身を確認する。

浩二、普段着に着替えて、やってくる。

浩二 なんだった？

光江 クッキー、……手作りだって、

浩二 へー。

光江 あと、なんたる、これ。CD。
浩二 ふーん。
光江 鯉節・・・なんでだろ。
浩二 いいじゃない、手作りっぽくて。
光江 なんかも若い人多かったわね。
浩二 幸せそうな、いい結婚式だった。
光江 そう？
浩二 お茶、入れるよ。
光江 うん、あ、でも、すぐ帰るから。
浩二 ありがたいね、送ってくれるなんて。
光江 ・・・・まあ。
浩二 ・・・・明ちゃん、綺麗だったねー。
光江 ああ、
浩二 ホント、お転婆でね、小さいときは、それがあんなに真面目な顔して
て、笑っちゃった。
光江 再婚なんですよ？
浩二 うん。
光江 ちよっと、派手じゃない？それにしては。
浩二 そうかな。
光江 やるなら、もっと地味にすべきよ。
浩二 さすがに親類は呼ばなかったみたい。
光江 でしょうね。
浩二 うん。はい。(とお茶を光江に)
光江 ああ、ありがとう。
浩二 ・・・・着替えたら？
光江 いい。
浩二 そう。
光江 (お茶を飲み) 大丈夫だったの？
浩二 え？なにが？
光江 いない間、おかあさん。
浩二 うん、大丈夫。
光江 ・・・・そう。
浩二 明ちゃん、いい娘なんだよー、
光江 両親来てなかったんじゃない？
浩二 誰？

光江 新郎の両親。

浩二 だから、複雑なんだよ、家庭が。

光江 そう。

浩二 いろいろあるんだ。

光江 まあ。

チャイムの音。

浩二 (ドアを開け／声のみ) ああ、どうも。

以下、声だけ。

敏子 今日はありがとうございます。

浩二 いえいえ。

敏子 いろいろすいませんでした。奥様、お忙しいのに。

浩二 いいですよ、こっちも仲人なんて、やるの初めてだったから、いろいろご迷惑おかけして。

敏子 いえ、本当にありがとうございます。

浩二 みんな二次会？

敏子 ええ、お友達と。

浩二 そう。

敏子 ホテルのスイートルームで。まったく、やることだけは、一人前で。

浩二 いいじゃない。あ、ちょっと上がったら？

敏子 いえ、いいです。今日は、お疲れでしょうし、また。

浩二 そう？

敏子 ええ。

浩二 泊まるの？

敏子 いえ、これから帰ります。

浩二 そう。

敏子 奥様、車ですか？

浩二 え？

敏子 いえ、下に停まっているから、ベンツ。

浩二 ああ、知り合いの。

敏子 そうですね、

浩二 邪魔？

敏子 管理組合の人がうるさいらしいから、黙って停めると。

光江 いいわよ、すぐ出るから。

浩二 すぐ出るって。

敏子 そうですか。じゃあ。

浩二 じゃあね。

扉の閉まる音。

光江、二人が話している間に、離婚届を机の上に置く。

浩二、戻ってくる。

浩二 (離婚届を見て)

光江 別れましょう。

浩二 ちよっと、待って。

光江 もっと素敵な人がいるわ。あなたには。

浩二

光江 申し訳なくって。

浩二 マンションは。

光江 こっちでやる。

浩二 そう。

光江 できれば今日、サインして欲しいのよ。

浩二 好きな人いるのか。

光江

浩二 かあさんが原因か。

光江 やっぱりうまくいかないわよ。こういう生活してたら。

浩二 原因なの？

光江 それだけじゃないけど、やっぱり大きいと思う。

浩二 そう。

光江 いいでしょ、もう。

浩二 付き合ってるの。

光江 え？

浩二 送ってくれた人、ベントの。

光江 付き合ってるっていうか、同僚よ。

浩二 話したい。

光江 え？

浩二 呼んでよ。

光江 関係ないわよ。私たちの問題でしょ？

浩二 いいから。

光江 ・・・・(少し考えるが、携帯電話で)もしもし、あの、ちょっと来てくれない？そう3Fの右の部屋。302・・・いいの、とにかく。

お願いね。(と電話を切る)

浩二 ・・・・

光江 会ってどうするの？

浩二 ・・・・

沈黙。

チャイムの音。

浩二、反応しない。

もう一度チャイム。

光江、対応する。

光江 (声) どうぞ。

井上 (声) いいの？

光江 (声) 早く。

井上 (声) 失礼します。

光江、井上、部屋に入ってくる。

井上 お邪魔します。

井上、離婚届を見る。

井上 ・・・・

光江 話したいっていうもんだから。

井上 ・・・・そう。

浩二 ・・・・今日はありがとうございました。妻を送ってくれて。僕も、一緒に。ここまで。

井上 いえ。

浩二 車、アレ幾らくらいするんですか。

井上 そんなに高くないですよ。

浩二 でも、カローラよりは高いでしょう。

井上 ええ。

浩二 だいたい何台分。

井上 えーっと、カロラーの値段がわからないと。

浩二 (光江に) 知ってる？

光江 さあ、

浩二 だいたい150万円くらいだと思います。

井上 そうですか。

浩二 何台分？

井上 2台分くらいですかね。

浩二 うそー(語尾上がる)

井上 中古でしたから。

浩二 3台分くらいするんじゃないですか。

井上 いや、そんなこと。

浩二 お金、あるんですね。

井上 独身なもので。

浩二 そんなに化粧品会社っていうのは、儲かるんだ。

井上 いや、僕は、

浩二 だって、同じ職場なんでしょう。

井上 (光江を見る)

光江 あなたなに？車の話をしたいの？

浩二 いや。

光江 井上さんは、うちの会社のコンサルタント。いま、同じチームなの。

浩二 へー。いや僕ね、ずーっと学校しか勤めたことないんで、わからない

んですよ、いまいち、会社の組織みたいなものが。そのコンサルタン

トっていうのは、いったいなにをする仕事ですか。

井上 (光江を見て)

光江 いいでしょ、そんなこと。

浩二 (井上に) ねえ、ちょっと教えてください。

井上 ……そのー、いわゆるアドバイザーみたいなもので、商品のマー

ケティングや、新製品の販売戦略などを、市場調査の結果と比較して、

浩二 やっぱいいです。うん、わかりました。

井上 ……

浩二 僕には興味ない。

浩二、立ち上がり、奥の部屋へ。

井上 別れるの？
光江 うん。
井上 どうするの？
光江 どうするって？
井上 別れて。
光江 うまくいってなかったの……いいの、別にあなたと結婚しようとか、
井上 そういうつもりじゃないから。
光江 ……そうだけど、これじゃあ、そう思われても仕方ない。
井上 そう、って。
光江 だから、俺たち、一緒になるから、別れるみたいじゃないか。
井上 そんなことないわよ。
光江 少なくとも、僕の存在があって、それが前提としてあって、だから「
井上 うなったって、そう思われても仕方ない。
光江 それはそうでしょ、
井上 いやだけどさ、
光江 悪者になりたくないのね。
井上 いや……そうじゃないけど。
光江 いいわよ、車で待ってて。
井上 いや、でも。
光江 早く。
井上 はいはい。……大丈夫かな。
光江 え？
井上 旦那さん。
光江 なに？
井上 目が、なんというか、うつろだよ。
光江 二人の問題だから。
井上 ちょっと無責任じゃないか。
光江 責任取れるの？あなたに。
井上 いや、そういうことを言っているわけじゃない。
光江 いいから、
井上 ああ。

浩二、登場。
ハンコを持っている。

浩二 井上さん、
井上 はい。

浩二 あと一つ聞きたいんですけど、いいですか。
井上 ええ。

浩二 実は僕、ずっと歯が、この右の奥の上なんですけどね、グラグラしてるんです。どこかいい歯医者、知らないですか。近くにあるんですけど、どうも印象が悪くて、行く気になれないものですから。ニコニコデンタルクリニックっていうんです。変な名前でしょ？

井上 変ですね。

浩二 あて、ありますか？

井上 ああ、えーっと、でも、それ、僕の家近所ですよ。

浩二 いいです。どこでも。いい歯医者なら、行きますから。

井上 じゃあ、世田谷なんですけど、

浩二 そうだ、地図、FAXしてくださいよ。

光江 あるの？FAX。
浩二 買うよ。

光江 いいじゃない、この辺の歯医者、タウンページかなかで調べたら。

浩二 わからないかなあ。生理なんだよ、僕にとってどこの歯医者に行くかっていうのは。

光江 ……勝手にしなさい。

浩二 じゃ、お願いします。その歯医者、住所か、あ、地図がいいかな？
結構方向音痴なもので、僕……あ、はんに。

浩二、また奥の部屋へ。

井上 今日は泊まったら？

光江 嫌よ。

井上 どうして。

光江 臭わない？

井上 なに？

光江 老人の臭い。

井上 そうかな……

光江 わたし、いまこうして普通にしてるけど、すごい汗かいているの。腋とか、背中とか。たぶん、びっしょりと。わたし、この臭いに耐えら

れないの。倒れそうなの。

井上 いまもいるの？旦那さんのお母さん。

光江 いるわ。奥の部屋に。怖くて、いけない。たぶん、耐えられないから、臭いに。

井上 ・・・・受け入れられないんだ。

光江 ええ、とても。

井上 でも、今日だけは一緒にいたほうがいい。こういうこと、そんなに簡単に決められないだろ。

光江 ・・・・

井上 ね。

光江 だめよ。プレゼンなんだから。私がいなくちゃ、ダメでしょ。

井上 いいさ、なんとかなる。

光江 ならないわよ。明日中に準備しないと、月曜に間に合わない。みんながんばって休日出勤するんだから。

井上 大丈夫だって。

光江 そんなことないわよ。なんでそんなこと言うの？

浩二、片手にペンを持って、片手に臭いを消すスプレーを持っている。

浩二 (スプレーを渡して) はい。

光江 (受け取らない)

浩二 (座って、離婚届に署名、捺印する)

光江 (その様子を見ている)

浩二 (離婚届を、光江に渡す) はい。

光江 (受け取る)

浩二 気をつけてね。

光江 うん。

浩二 (スプレーを、光江に噴射する)・・・後ろも・・・
井上さんも、

と、浩二、井上にスプレーする。

光江 出しておくから。

浩二 うん。

光江 たぶん引越すけど、

浩二 (井上に) 後ろも

光江 行くわ。

浩二 これで大丈夫です。

光江 行きましょう。

井上 じゃあ、失礼します。

浩二 さよなら。

井上 さよなら。

光江 じゃあね……いままで、ありがとう。いろいろ……感謝、してるから。こう見えても。

浩二 これ、持って行けば？

浩二、光江に鯉節を渡そうとする。

光江 いいわ。

浩二 そう？

光江 私は、いい。

浩二 わかった。

光江 じゃあね。

浩二 じゃあ。

光江、出て行く。

浩二、その場にいる。

いつものように、茶碗をゆすぎ、水気を拭き取る。
鏡で歯を見る。

浩二 あ、

歯が抜けたようだ。

口のまわりと、手が、血に染まる。

タオルで止血する。

歯を、机の上に置く。

浩二、なにかを決断したように、血に染まったタオルを持って、奥の部屋に。
時計の秒針の音。

しばらくして、タオルを持ったまま、戻ってくる。
タオルの臭いをかぐ。

消臭スプレーをタオルに吹きかける。
もう一度、臭いをかぐ。

冷蔵庫を開けて、牛乳を飲む。

歯に沁みる。

沁みて、沁みて、痛みを堪えられない。

しばらく我慢して、その痛みが通り過ぎるのを待つ。

やがて暗転。

【第四場】 夏

【8】 日曜の夕方

蝉の音。

椅子に、藤村と明子が座っている。

明子 暑いわね。

藤村 ああ。

明子 汗が出てくる。じっとしているだけで。

藤村 そうだね。

明子 こんなに暑かったっけ？

藤村 そうだろ。

明子 ・・・・

藤村 懐かしいな。ここ。

明子 そう？

藤村 懐かしい。

明子 作りはウチと一緒よ。

藤村 そうだろ、団地なんだから。

明子 まあ。

藤村 そういうことじゃなくってさ。

明子 ふーん。

浩二、やってくる。

浩二 ごめん、ごめん。

藤村 僕、行ったのに。

浩二 いいのいいの、ほんとに。

浩二、コンビにで、いろいろ買ってくる。
ビールもある。

浩二 ほんとにいらない？

藤村 ええ、

明子 ちょっと買い物行くのよ、これから。ほら、運転が。

浩二 そっか。

藤村 すいません。

浩二 夜、来ればよかったのに。そしたら。

藤村 ええ。

浩二 じゃ、失礼して。

浩二、缶ビールを一気に飲む。

浩二 あー、うまい。うまいなー。

浩二、2人を「もてなす」ことを忘れてる。

浩二 どう？北海道。

藤村 ええ、まあ、なんとか。

浩二 チーズ作ってるんだって？

藤村 ええ、まだ、見習いですけど。

浩二 いいじゃない。あ！

明子 なに？

浩二 ごめん。1人で飲んで・・・お茶、お茶入れるよ。

明子 いいのいいの、すぐ行くから。

藤村 ご挨拶だけなんで。

浩二 いいから、いいから。

浩二、お茶を入れようとする。

明子 今度遊びに来てくださいよ。北海道。

浩二 行く行く。帯広空港だっけ？

藤村 ええ、迎えにいきますから、空港まで。

浩二 どのくらい？空港から。

藤村 2時間くらいですね。

浩二 びっくりしたよ、北海道なんて、新居。

藤村 なんか逃げ出すようになってしまつて。ホントは、お世話のお手伝い

させてもらいながら、とも思つたんですけど。この近くに住んで。

浩二 なに言つてるの、いいんだよ。気にしなくて。

藤村 夢だつたんです。

明子 なんか、おばさん、話したことあるんだつて、この人に。若い頃の話。

知ってる？

浩二 へー、いや、どんなこと？

明子 若い頃、おばさんの恋人が、北海道の人で、なんか急に帰ることにな

つちやつて、仕事かなにかで、それでそのまま別れちゃつたんだつて。

浩二 そうなんだ。

明子 ま、別れなかつたら、浩ちゃんもいなかつたわけですけど、この世に。

浩二 そうだね。よかつた、別れて。(笑)

藤村 たぶん、そんなつもりで話したわけじゃなかつたと思うんです。だけ

ど、なんだか、その話し聞いて、初めて希望が持てたというか、いま

考えてもよくわからないんですけど。

浩二 へー。

藤村 救われて。だから、結婚したら、北海道に住もうつて、ずーつと決め

てたんです。

明子 意外とロマンチストなのよ。

浩二 男はみんなそうだよ。ね、

藤村 ええ。

明子 そうなの？

藤村 そうそう。

明子 あ、適当ー。

浩二、固まっている。

明子 どうしたの？
浩二 いや、お湯が。
明子 なに？
浩二 おかしいなあ。ごめんねー、これから沸かす。
藤村 いや、ほんとに、お構いなく。
浩二 おかしいなあ。

浩二、ポットの蓋をあけて、

浩二 あー！
藤村 どうしました。
浩二 カビてる。
明子 え？
浩二 なんだよー、これ。

浩二、おもむろに、ポットを洗い出す。
明子、心配で立ち上がり、覗き込む。

明子 (顔をゆがめて) ずっと使ってなかったんでしょ。
浩二 え？
明子 ねえ。
浩二 そうだったかなあ。
明子 そうよ。この夏、一気に繁殖したのね。
浩二 すごい生命力だね。
明子 新しいの、買いな。
浩二 いやでも、
明子 ね。
浩二 でも、
明子 (水道の水を止める)
浩二 ……
藤村 あの、これ。
浩二 なに？
藤村 チーズです。
浩二 ああ、
藤村 迷ったんです。でもやっぱり、これがいいかって。

明子 最初、木彫りの熊にしようとしてたのよ、鯉くわえてるやつ。それだけはやめてー！って。

藤村 いいですか？

浩二 なに？

藤村 ご挨拶して。結婚の報告もまだだったし。

浩二 かあさんに？

藤村 ええ。

浩二 ……わからないよ。きっと。

藤村 構いません。やっと、報告できることができましたから。大学なんて、ほんとは行きたくなかったんです。ただ、何かしなくちゃと思って、

それで最初は……

浩二 いいさ、問題ない。

藤村 いいですか。

浩二 (少し迷うが) どうぞ。

藤村 すいません。

藤村、チーズを持って、退場。

明子 どうしたの。

浩二 いやいや。

明子 大丈夫。

浩二 どうして。

明子 だって、ポットにカビだなんて。

浩二 ああ。

明子 留守にしていたの？

浩二 いいや。

明子 ……

浩二 そういえば、

明子 なに？

浩二 最近、お客さんが来ないな。だからだよ、だから、あれでお茶入れてなかったんだ。だからだ。

明子 ……子供、いるんだよ。

浩二 え？

明子 いるんだ。

浩二 おめでとう。

明子 ありがとう。

藤村、鼻を腕で押さえながら、やってくる。

明子 どうしたの？

藤村 ……(浩二を見る)

明子 ねえ。

藤村 なんで？

明子 え？

藤村 どうしてですか。

浩二 なんてかなあ。

藤村 ……

明子 どうかしたの？

藤村 おかあさんが、

明子 え？

明子、奥の部屋に行こうとするが、藤村、それを制し、

藤村 やめたほうがいい。

明子 なぜ？

藤村 いいから。

浩二 ……おかしいな、クーラー、つけてあるんだよ。そんな臭いがするわけではないじゃないか。

藤村 すごいですよ。

浩二 嗅覚はね、ずっと嗅いでいると、慣れるんだよ。嗅覚疲労っていつてね、……ぼくは全然感じない。

藤村 でも、

浩二 ……

藤村 どうして……どうして？

浩二 ……歯が抜けたものだから。

藤村 どうして……

浩二 だから、歯が抜けたから……だよ。

藤村 ……

浩二 (棚の引き出しから抜けた歯を取り出し、机に置く)

藤村　　なんですか？

浩二　　齒、右の上の奥の齒。これが抜けたから、

藤村　　そんな理由ってありますか？

浩二　　ある。あるんだよ、藤村くん。

藤村、冷静に椅子に座る。

浩二、立ち上がり、電話で110番をまわす。

浩二　　もしもし、警察ですか。ええ、殺人です。いや僕が。ええ、そうです。僕が殺しました。母親を。ええ、住所ですか。(明子に)ここ住所で、2-3-10だっけ？

明子　　(うなづく)

浩二　　えーっと、小川町2-3-10、ええ、2-3-10です。そうです。

ええ、その団地です。ええ、302です。C棟の302。はい、よろしく願います。はい、失礼します。(電話を切る)

浩二、換気扇をまわし、その下でタバコを吸う。

浩二　　この歳になって、タバコ吸う人間になるなんて思いもしなかった。

藤村　　ええ……

浩二　　いまじゃすっかりヘビースモーカーだよ。

藤村　　……

浩二　　なんか疲れたなあ。

藤村　　……

浩二、静かにタバコを吸う。

遠くからサイレン。

やがて闇。

幕。